

中国日本学研究优秀
硕士论文『卡西欧杯』

获奖
论文选

(四)

北京日本学研究中心◎编



中国日本学研究优秀硕士论文 “卡西欧杯”获奖论文选

(四)

北京日本学研究中心 编

學苑出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

中国日本学研究优秀硕士论文“卡西欧杯”获奖论文选. 4/北京
日本学研究中心编. —北京: 学苑出版社, 2012. 10
ISBN 978-7-5077-4132-2

I. ①中… II. ①北… III. ①日本—研究—文集
IV. ①K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2012) 第 248259 号

责任编辑: 韩继忠

出版发行: 学苑出版社

社 址: 北京市丰台区南方庄 2 号院 1 号楼

邮政编码: 100079

网 址: www.book001.com

电子邮箱: xueyuan@public.bta.net.cn

销售电话: 010-67675512、67678944、67601101 (邮购)

经 销: 新华书店

印 刷 厂: 永恒印刷有限公司

开本尺寸: 787 毫米 × 1092 毫米 1/16

印 张: 24

字 数: 500 千字

版 次: 2012 年 10 月第 1 版

印 次: 2012 年 10 月第 1 次印刷

定 价: 60.00 元

版权所有 翻印必究

如发现质量问题, 请直接与发行部联系调换

第四届中国日本学研究
“CASIO杯”优秀硕士学位论文奖
颁奖典礼



获奖学生、学校代表、评审委员与嘉宾合影

此论文集的出版得到

卡西欧（上海）贸易有限公司的资助

编委会

主 编 徐一平

执行主编 潘 蕾

前書き

中国日本語教学研究会、教育部高等教育外国語専攻教育指導委員会日本語部会、北京日本学研究所センターの共同主催による『第四回中国日本学研究「カシオ杯」修士論文コンテスト』は、カシオ上海貿易株式会社の多大なご支援と全国各大学の日本語日本文学専攻修士課程の先生たちや学生たちのご協力のもとで、2011年の9月、「北京外国語大学成立70周年記念行事」開催期間中に行われました。

2010年の第三回コンテストに引き続き、今度も全国の26大学から34篇の優秀修士論文が推薦されました。これらの優秀修士論文は、いずれも各大学の修士課程の学生たちによる最新の日本研究成果であり、また各大学の指導に当たった先生たちの指導の賜物であります。これらの論文に対して、巻末に掲げられた全国各大学や研究所の日本学研究所の専門家による厳しい予備審査と最終審査を通して、一等賞、二等賞、三等賞の論文が決定されたのであります。そして、ここに二等賞以上に選ばれた論文を集め、『中国日本学研究優秀修士論文「カシオ杯」入賞論文集(四)』を上梓することになりました。

特にここで触れておきたいことは、昨年(2010年)の3月11日、未曾有の大地震、津波そして原発事故が日本を襲い、世界にも大きな衝撃を与えました。一年たった今でも、日本はまだ完全にその衝撃から立ち直っていないかもしれませんが、しかし、この大きな災難に立ち向かっていく日本人民の姿は、また全世界を震撼させたと思います。

今年は、中日国交正常化の40周年に当たります。ここ40年間の中日関係を振り返ってみると、一番大きな変化は、やはり人の往来ではないかと思えます。1972年、国交回復当初の往来人口は1万人足らずだった時から、2011年の統計によれば、その数が600万人近くになっているという結果が出ております。これだけの人的交流があれば、お互いの理解がきっとますます深まるに違いありません。しかし、ここでは温家宝総理がかつて言った言葉が思い出されます。中国で勝ち取った成果はどんなに大きくても、その人口で割ると小さなものになり、中国で起きた問題はどんなに小さくても、その人口で掛けると大きなものになる。その意味で考えれば、中日両国人民の間での人的往来は、中国人口に引きつけて考えた場合、まだまだ足りないのではないかと思います。そして、中国人の日本理解を助けるために、われわれ日本語を勉強する者、日

本を研究する者がもっともっと努力しなければならないと思います。

ここに掲載する優秀な修士論文は、いずれも中日相互理解を深めるために大きな参考になる素晴らしい作品です。このコンテストが今後も継続されていくことは、きっと中日両国の若者の相互理解、ひいては国民全体の相互理解を促進していくに違いありません。

最後になりますが、このコンテストをずっと協力していただいているカシオ上海貿易株式会社、審査委員を担当していただいた先生方、またはこの論文集の出版のために協力していただいた学苑出版社の皆様に感謝の意を申し上げたいと思います。

北京日本学研究センター主任

中国日本語教学研究会会長

徐 一平

2012 年 6 月

祝 辞

在深秋的北京,在收获的季节,第四届中国日本学研究“casio 杯”优秀硕士论文评选如期举行,其中获得二等奖以上的论文再一次以论文集的形式与读者见面。在此表示祝贺的同时,感谢筹办、承办、参与此项评选活动和编辑工作的所有单位与个人。中国高等学校研究生阶段的日语教育,无论是规模和质量都已经走在世界的前列,热切期待通过此项优秀论文评选活动推进中国的硕士研究生教育,使中国的日本学硕士学位论文也保持世界水准。

天津外国语大学校长

中国日语教学研究会名誉会长

修 刚

実りの秋が深まる中、北京にて第四回「カシオ杯」全中国日本学研究修士論文コンテストが開催され、そして、その中で二等賞以上に入賞された論文が茲に論文集の形で上梓されたことにこのうえなく喜びを覚え、祝賀の意を表すとともに、コンテストの開催と論文集の編集、出版のため、ご尽力、ご支援いただいた関係部門、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。中国の大学院における日本語教育は規模も質も、世界の最高基準をキープしていると評価できるなか、このような修士論文コンテストを通じて、中国の日本学研究修士コースの教育水準と修士論文の水準も世界レベルをキープできることを心から期待しております。

天津外国語大学学長

中国日本語教学研究会名誉会長

修 剛

寄 语

贺《中国日本学研究优秀硕士论文“卡西欧杯”获奖论文选(四)》的顺利出版!

这本论文集再次展现了我国日语语言文学专业硕士研究生的最新研究成果。语言、文学、文化几个方向的研究既说明了研究生们独立研究和思考的能力,也呈现出他们对于专业现实问题的敏锐性及运用日语表达思想和创见的水平。

做学问应该是一种乐趣。我们要认真、用心地对待每一个课题,不去想那些功利的目的,要重学问,不重学位。做学问要多读书,尤其多读大家之书,熟悉相关研究领域的文献。确定选题后,要善于跟踪国内外最前沿的研究,尽力使自己的研究成为相关领域的专家之言。

切望广大日语硕士生同学们能脚踏实地地潜心向学,恒心求学,用心问学,以勤奋、努力、智慧去研精思远,究微践行,去书写属于自己的人生。

教育部高校外语专业教学指导委员会日语分委员会主任
中国日本文学研究会会长

谭晶华

古之成大事者,不惟有超世之才,亦必有坚忍不拔之志。

——与广大日语研究生们共勉

教育部高校外语专业教学指导委员会日语分委员会主任
中国日本文学研究会会长

谭晶华

目 次

前書き	(1)
祝辞	(3)
寄语	(4)

言語研究部門

一等賞

沈 晨	動詞連用形転成名詞の許容度についての考察 ——動詞の意味の完結性という観点からのアプローチ	(3)
-----	--	-------

二等賞

郭 杰	複合動詞「～あがる」と「～あげる」の多義性について	(38)
-----	---------------------------------	--------

二等賞

曹苏娜	語用論の視点からの日本語命令表現に関する研究	(93)
-----	------------------------------	--------

文学研究部門

一等賞

陈童君	『祖国喪失』と堀田善衛の〈上海・1945〉 ——「国際都市」における「裏切り者」の逃亡と越境	(143)
-----	---	-------

二等賞

吴 辻	国木田独步文芸研究 ——『源おち』『河霧』『春の鳥』の悲劇について	(185)
-----	--	-------

二等賞

郭 健	徳富蘆花『不如帰』の翻訳に関する研究 ——英語訳と中国語訳を中心として	(233)
-----	--	-------

社会文化研究部門

一等賞

雷孟静 “接受”与“创新”:手冢治虫漫画中的孙悟空形象研究 (281)

二等賞

陈雷洋 肯尼迪政府对日安全政策 (336)

2011 年『中国日本学研究「カシオ杯」修士論文コンテスト』入賞者 (368)

2011 年『中国日本学研究「カシオ杯」修士論文コンテスト』審査員 (371)

言語研究部門

動詞連用形転成名詞の許容度についての考察

——動詞の意味の完結性という観点からのアプローチ

沈 晨

目 次

第1章 本稿の目的と先行研究

1.1 はじめに

1.2 先行研究

1.2.1 品詞の転成に関する研究

1.2.2 連用形名詞に関する研究

1.2.3 先行研究の不足と本稿のねらい

第2章 調査対象、方法、結果

2.1 調査対象

2.2 調査方法

2.3 調査結果の整理

2.3.1 四つのレベル

2.3.2 レベル2 及びレベル1・2・3のつながりについて

2.3.3 連用形名詞化の全体像

第3章 他動詞の各レベル間の動詞分類対照

3.1 他動詞のレベル1とレベル3の対照

3.1.1 調査結果の整理

3.1.2 内項との関係

3.1.3 他動性の問題

3.1.4 主体動作動詞内部についての考察

3.2 レベル4について

3.2.1 調査方法

3.2.2 調査結果

第4章 自動詞の各レベル間の動詞分類対照

4.1 自動詞のレベル1とレベル3の対照

4.1.1 調査結果の整理

4.1.2 項との関係

4.1.3 自動性の問題

- 4.1.4 主体変化動詞内部についての考察
- 4.2 レベル4について
- 4.3 レベル2について
- 第5章 自他動詞および有対自他動詞について
 - 5.1 自他両用動詞
 - 5.2 有対自他動詞
 - 5.3 自他動詞間の比較
- 第6章 終章
 - 6.1 まとめ
 - 6.2 今後の課題
- 参考文献
- 付表1 他動詞の連用形名詞化状況
- 付表2 自動詞の連用形名詞化状況

第1章 本稿の目的と先行研究

1.1 はじめに

和語は造語力が弱いといわれる中、古くから動詞連用形をもって名詞とするという動詞から名詞への一種の造語法がある。例えば、「動く」→「動き」、「働く」→「働き」という例がそれである。

ただし、それはあらゆる和語動詞にできる転成方法ではなく、例えば、「会う」には「会い」、「起きる」には「起き」、「慌てる」には「慌て」といった名詞はあまり見当たらないのである。

単純和語動詞のうち30%~40%の語しか転成の名詞形を持たないようである(西尾1961、金2003)。世界諸言語の中でかなり体系性の整った言語と言われる日本語でも、連用形名詞に至っては不均衡性が現れる。いったいどんな語が転成可能なのか、語自体の性質と関わりがあるのだろうか。これは語構成上において基本かつ重要な問題であり、これを明らかにすることにより、和語の造語力に対する認識もいっそう深まるであろう。また、内在の規則的なものをある程度究明することにより、外国人日本語学習者にとっても便利になると思われる。

この問題を扱った先行研究には西尾(1961)、岡村(1995)などがある。西尾(1961)は、意味・音節・語種という三つの方面から推測を出したが、再検討する余地があるように思われる。岡村(1995)は動詞の性質からアプローチし、ある程度結論を出したが、考察対象が58語のみで、調査規模としてはやや小さく、動詞の性質に関する考察も寺村(1982)と金田一(1955)の動詞分類を参考しただけだった点が残念に思われる。

先行研究でも一部明らかにしたように、有対自他動詞では、自動詞のほうが転成されやすい傾向がある。例えば「深まり」があるのに対し「深め」がなく、「高まり」があるのに対し「高め」がない。この転成という過程で、やはり動詞自体の何らかの性質が制約を加えていることが想定できる。近年来、動詞について、アスペクト・項構造・語

彙概念構造などの面からアプローチした研究が多く、多大な成果が収められ、それらのものを参考にしながら、この問題を考えていこうと思う。

そこで、本稿では「動く」→「動き」のような単純和語動詞の名詞転成を研究対象とし、その転成過程での動詞の意味による制約要因を究明したい。

1.2 先行研究

この節でまず品詞の転成に関係するものと連用形名詞に関係するものに分け、先行研究を見ていきたいと考える。そして、先行研究の不足をまとめ、本稿のねらいを明らかにする。

1.2.1 品詞の転成に関する研究

本稿の扱う現象は、動詞から名詞への一種の品詞の転成であり、この過程での制約を究明するためには、まずこの「転成」という過程はどういうものなのか、品詞の変化とともに何か変わったのかについて考える必要があるように思われる。

1.2.1.1 品詞の転成とは

『国語学大辞典』(1980)は、「品詞の転成」という項目を単独に立てておらず、「語構成」という項目の下位項目として「転成」を設け、下記のように述べている。

一般に品詞が違うことは別語とみなす根拠になりうるものとされるから、品詞をかえること(品詞の転成)は語構成の一つの手段である。ただし、転成の範囲をどう考えるかには、第一に、範囲を狭くとするものとして、「ながれ(動詞連用形)」→「ながれ(名詞)」、「全体(名詞)」→「全体(副詞)」のように、ほかの要素がつけ加わることなくただ語形変化の体系や文中の機能が変わる場合だけを転成とする説がある。(中略)転成にあたっては「赤」→「赤い」のようにほぼ純粋に品詞性の変化にとどまるものもあるが、意味の変化を伴う例も多い。(中略)動詞からの派生名詞でも「うごき」「つり」など動作を表わすもの以外に、「ちらし」「あみ」などの対象、「すり」「よっぱらい」などの人、「はかり」などの道具、「とおり」などの場所と、さまざまな現象を表す例がある。(『国語大辞典』pp. 425～426)

1.2.1.2 名詞化の過程

池上(1978)で品詞と意味の関係について興味深い論述がある。

「名詞」は<もの>を表わす語とは限らない。しかし、その後の検討からも明らかな通り、指されているものが<もの>でなければ、名詞はそれを<もの>化して提示するという働きも有している。この場合、指されているもの自体は<もの>ではないのであるから、名詞として表現することの有するこの効果は、純粋に言語的な操作、いわば、言語によって作り出された虚構である。「名詞化」の持つこのような働きは「実体化」(hypostatization)と呼ばれることがある。「帰ル」と言えば、誰か、あるいは何かについて<帰還>ということが起こるという感じであるが、「帰リ」と